

烈火の太洋 1

セイロン島沖海戦

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之
地 図 ・ 図 版 安達裕章
編 集 協 力 らいとすたつふ

目次

序章

9

第一章 惑う国

15

第二章 帝国の選択

45

第三章 インド洋の「ネルソン」

89

第四章 ビッグ・セブン激突

133

第五章 南シナ海の火の手

209



インド洋周辺図





烈火の太洋 1 セイロン島沖海戦

序章

「敵味方不明機、左正横。高度二〇〇〇（二〇〇〇メートル）！」

艦橋見張員が、大声で報告を上げた。

連合艦隊航空参謀日高俊雄少佐は、旗艦「長門」の左舷上空に双眼鏡を向けた。

機体形状には見覚えがある。

日高自身が、識別表を繰り返し見て頭の中に叩き込み、基地航空隊の教官勤めをしていたときには、生徒たちに覚え込ませた機体だ。

太い胴体。対照的に小さく見える二基のエンジン。丸っこい機首。段差があるコクピット。

「ロッキードA28 ッハドソン」。米軍の中型爆撃機です。マニラ近郊の飛行場から飛来した機体だと推測されます」

日高は、参謀長の福留繁少将に伝えた。

「米軍機は、こんなところまで進出して来たのか」

航海参謀永田茂中佐が呆れたような声を上げた。現在、連合艦隊の直率部隊である第一艦隊は、南シナ海の西部を南下している。

米国領フィリピンの中心地であるマニラからは、五〇〇哩以上の距離がある。

米軍機は、南シナ海の中央を大きく越え、仏印——フランス領インドシナ付近まで飛来したのだ。

「偵察か、それとも挑発でしようか？」

「両方だろう。我が艦隊の陣容と針路、速度を見たとが、英国に通報する。我が軍が発砲するようなことがあれば、それを口実に参戦する。主目的は、後の方だろうが」

疑問を提起した首席参謀黒島亀人大佐に、連合艦隊司令長官山本五十六大将が答えた。

「けしからん。中立国にあらざる振る舞いだ」

吐き捨てるような福留の言葉に、山本は苦笑しながら言った。

「彼らも必死なのだ。最も大事な盟邦である英国が、

亡国の危機に瀕しているとすれば」

この日は、昭和一五年六月三〇日。

日本が参戦した昭和一四年、二月一日以来、七ヶ月が経過している。

盟邦ドイツの快進撃の前に、西欧諸国は軒並み降伏し、日本も欧州諸国の極東における植民地を制圧することで、ドイツの側面援護を行った。

現在、日本、ドイツ、イタリアの枢軸国と戦っているのは、イギリスのみだ。

イギリスを屈服させれば、今回の戦争は終結し、枢軸国が何よりも警戒している米国の参戦も防ぐことが出来る。

日本の新たな作戦目標は、英国領インドの制圧だ。

インドは英本国にとり、食料、繊維製品、鉄鋼等の供給源となっており、英国経済の中でも重要な地位を占めている。

「イギリスは、インド以外の全ての植民地を失っても生き延びられるが、インドを失えば太陽は没する

ことになるう」

という言葉まであるほどだ。

ドイツの英本土攻撃に呼応し、日本がインドを攻略すれば、英国は継戦能力を喪失する。

インド進攻作戦は、それほど重要な意味を持つていた。

海軍はこの作戦に、連合艦隊の直率部隊である第一艦隊と、南方作戦の支援任務を終えた第二艦隊を投入すると決定し、連合艦隊司令長官が陣頭指揮を執ることになった。

第一艦隊は、中継点であるシンガポールへの移動に際し、西寄りの航路を取って、フィリピンの米軍を刺激しないよう努めた。

だが、米軍は第一艦隊の動きを見逃さず、哨戒機を送って来たのだ。

「全艦に命令。別命あるまで発砲を厳禁する」

山本は、厳しい声で命じた。

第一艦隊隷下の各戦隊には、出港前の最後の作戦

会議で、

「米軍の挑発には断じて乗るな。何をされても、絶対に発砲するな」と命じてある。

命令は、各艦の隅々にまで行き渡っているはずだが、艦隊は戦場に向かう途上にあり、乗員たちは血気にはやっついている。

山本は不測の事態を恐れ、今一度命令を徹底したのだ。

米軍機が、距離を詰めて来る。

「長門」の動きに追従しているようだ。

艦形識別表から、隊列の中央にいるのが「長門」と「陸奥」——四〇センチ砲を装備した、日本海軍最強の戦艦であると思われたのかもしれない。

爆音が拡大する。

第一艦隊は針路も速度も変えることなく、南下を続けている。米軍機の姿など全く見えず、音も聞こえないような態度だ。

爆音が、左から右に通過した。

水平爆撃をかけて来るのでは——と危惧したが、直撃弾の衝撃も、海面に奔騰する水柱もなかった。

日高は、右舷上空に双眼鏡を向けた。

A 28が左の水平旋回をかけると共に、高度を落とされている。

「雷撃をかけるつもりじゃないだろうな？」

永田航海参謀が不安そうに言った。A 28の動きが、雷撃訓練を行っている九六式陸上攻撃機の動きと似ているように見えたのだろう。

「あの機体に、雷撃の能力はありません。御心配には及びません」

日高は、A 28の能力を思い出しながら言った。

A 28は、輸送機として開発された機体を哨戒機に転用したものだ。七〇〇キロ程度の爆弾搭載量を持つが、運動性は鈍く、雷撃に向く機体ではない。

第一艦隊を挑発し、最初の一発を撃たせることが狙いなのだ。

A 28が、低空から接近して来る。

艦隊の右方を守る駆逐艦二隻の間を通過し、「長門」との距離を詰めて来る。

「砲術より艦長——」

「駄目だ。絶対に撃つな！」

射撃指揮所からの催促に対し、「長門」艦長徳永栄大佐が厳しい声で命じた。

「そうだ、それでいい」

山本が、ちらと右舷側を見やって言った。

巡洋艦、駆逐艦の乗員も、発砲したい気持ちを抑えている。「長門」の砲術科員に、耐えられない道理がない、と言いたいようだった。

A 28の機影が膨れ上がり、爆音が急速に拡大する。航空戦の心得がない者にも、「長門」を攻撃しようとしているように見えるはずだ。

(耐えてくれ、頼む)

日高が「長門」の砲術科員に胸中で呼びかけたとき、爆音が頭上を通過した。

しばし、轟音が周囲に満ち、艦橋内の全ての音がきき消された。

音は、艦の左舷側へと遠ざかってゆく。

日高が双眼鏡を向けると、A 28が上昇しつつ、第一艦隊から遠ざかってゆく様が見えた。

挑発は、一度だけに留めるようだ。

「よく我慢した。砲術の連中を、ねぎらつてやってくれ」

山本が徳永艦長に声をかけ、福留が安堵したように言った。

「いつも通りに終わりましたな。いい加減で、諦めて欲しいものですが」

在比米軍による挑発行為は、日本の参戦直後から始まっている。

南方に向かう輸送船団やその護衛艦艇が、たつた今のA 28のように米軍機の異常接近を受けたこともあるし、南方から日本本土に資源を運ぶ輸送船が、米軍の巡洋艦や駆逐艦に、数時間に亘ってつきまと

われたこともある。

軍艦も、民間の船も、それら全てを受け流し、挑発に耐えて来たのだ。

嫌がらせには慣れたものの、苛立ちはつのる。

福留の言葉は、挑発を受けたことのある艦船の乗員や、輸送船で運ばれる陸兵の誰もが感じているであろうことを代弁していた。

「彼らが諦めるとすれば、米国の参戦前に英国が降伏し、戦争が終わったときだろうな」

山本が独りごちるように言い、通信参謀田村三郎中佐に命じた。

「米軍機に接触を受けた旨、軍令部と海軍省に報告電を打つてくれ。外務省を通じて、抗議だけはしておこう」

第一章 惑う国

1

「あの辞令を受け取ったときが、俺にとつての開戦だった」

海軍少佐日高俊雄は、そのように思っている。

霞ヶ浦航空隊で教官勤めをしていた日高に、海軍省人事局より、

「五月一五日付ヲ以テ連合艦隊航空參謀勤務ヲ命ズ」

との辞令が届いたのは、昭和一四年五月二日だ。

それまで、飛行機の操縦桿ばかりを握つて海軍生活を送つて来た身が、連合艦隊の旗艦に乗り組む身となつたのだ。

日高は、霞ヶ浦から連合艦隊旗艦「長門」が停泊している瀬戸内海の柱島泊地に移動する前に、東京・霞ヶ関の海軍省に立ち寄つた。

そこで軍務局に勤務している江田島同期の浜亮

一中佐と会い、飲みを誘われたのだ。

「聞き慣れない職名だな、航空參謀というのは」

東京・新橋にある小料理屋で、席に座るなり、

浜は日高に言つた。

「次官の主張で、新設されたポストだそうだ」

日高は応えた。

階級は浜の方が上だが、今は江田島の同期生同士であり、同格で話している。

「これからの海戦は、航空兵力の活用が鍵になる。連合艦隊司令部にも、航空の専門家が要だ。次官

はそのように考えられ、海軍大臣に掛け合つて、新しいポストを設けられたということだ」

「山本さんと軍務局の局長は、名うての航空主兵主義者だからな」

浜はニヤリと笑つた。

この当時、海軍次官は山本五十六中将、軍務局長は井上成美少将が務めている。

二人とも、「戦艦などは時代遅れ。これからの海

軍の主力は航空機だ」と主張する、航空主兵思想の提唱者だ。

同じ航空主兵主義でも、山本は空母と艦上機を重視しているのに対し、井上は基地航空隊を重視しているという違いがあった。

「GF航空参謀の第一号とは、栄転じゃないか」

同期生の名誉を素直に喜ぶ浜に、日高は熱爛を一杯あおつてから応えた。

「正直に言うと、あまり有り難くはない。俺は飛行機乗りになりたくて、海軍に入ったんだ。周りをいかめしい顔の長官や参謀に囲まれるなんて、息が詰まる。操縦桿を握つてる方が、性に合っている」

日高は、神奈川県横須賀で生まれ育つた身だ。

実家の近くには海軍の追浜飛行場があり、黎明期にある海軍航空隊の飛行機が空を飛び回る様を見ながら育つた。

自然と空への憧れを抱くようになり、海軍士官となる道を選んだ。

江田島卒業後は、一切の躊躇なく航空を専門に選んだ。卒業時の席次は、中の下といったところが、航空は海軍の主流派ではなかったため、簡単に希望が通つたのだ。

以後、日高は海軍生活のほとんどを、航空機の操縦桿を握つて過ごしている。

同期生の中には、海軍大学に学び、海軍省や軍令部で勤務するようになった者もいるが、日高は中央での栄進には一切興味を示さず、各地の航空基地や空母を渡り歩いて来たのだ。

参謀の飾緒など、自分には似合わない。飛行服こそが、自分に最も似合う海軍の制服だ——そう思わずにはいられなかった。

浜は、真顔に戻つた。

「搭乗員は、いつまでもできる仕事ではないだろう。年齢が上がれば、艦船勤務や地上勤務に就かなければならないんだ。GFの参謀を経験しておくのも、将来のためになると思うがな」

「俺は、海軍大学では学んでいない。参謀の仕事なんてどうやったらいいのか、見当もつかん」

「別段、難しい仕事じゃない。長官や参謀長から質問を受けたら、飛行機について知っていることを話せばいいのさ」

「気楽に言ってくれる」

かぶりを振った日高の杯に、浜は酒を注いだ。

「現在のGF司令部に、航空の専門家はいない。次官はそのことを憂慮され、貴様のような実戦派の将校を送り込もうと考えられたのだろう」

「名誉な話だが、俺は本当に飛行機のことしか知らんぞ」

「貴様は、操縦桿を握っていただけではあるまい。

母艦や航空本部で勤務した経験もあるはずだ」

「一時期だけはな」

日高は応えて、酒をあおった。

少佐昇進後、日高は小型空母「龍驤」の飛行隊

長を一年勤め、次いで航空本部の総務部で航空行政

を経験した。その後は横須賀航空隊、霞ヶ浦航空隊で教官を務め、現在に至っている。

「母艦や航本での仕事を経験したことが、貴様の強みなんだよ。航空関係の仕事を幅広く経験し、広い視野を培った貴様なら、参謀に適任だと、中央が判断したに違いない」

「かいかぶりじゃないのかね、そいつは」

「実際に参謀の仕事が始まれば、なんとかなるものだよ。俺だって、舞鶴の鎮守府で初めて参謀の仕事を経験したときは不安だったが、どうにかこなせたんだ。貴様だって、うまくやれるだろう」

「新米の参謀を力づけてくれて、礼を言うよ」

今度は、日高が浜の杯に酒を注いだ。

「貴様はどうなんだ？ 赤レンガも、ごたつているみたいだが」

浜は、しばし沈黙した。話していいものかどうか、迷っているように見えた。

ややあつて、一口だけ酒を飲み、口を開いた。

「局長からは、近々大きな異動があるかもしれないと言われた。ひよつとすると部署が替わるか、どこかの鎮守府に行かされるかもしれない」

この年の一月五日、近衛文麿内閣の後を受けて、男爵・平沼騏一郎を後継首班とする内閣が成立した。閣僚には、近衛内閣から留任した者が多く、前内閣の性格を色濃く受け継いでいたが、大きく変わったのが対外政策、特に欧州で膨張政策を採っているドイツ、イタリアとの関係だ。

日本は昭和十一年一月、国際共產主義運動を主導するコミンテルンからの共同防衛を謳った防共協定をドイツと締結し、その一年後にはイタリアも加盟して、日独伊防共協定が成立した。

近衛内閣の時代には、陸軍が同協定を日独伊三国の軍事同盟に発展させるべく、政府に強く働きかけていたが、海軍は強硬に反対した。

「独伊両国は、米英仏と対立関係にある。両国との同盟は、必然的に米英仏との関係悪化を招く。最悪

の場合、戦争に繋がる危険もある」

というのが、その理由だ。

その急先鋒となったのが、海軍大臣米内光政、海軍次官山本五十六、軍務局長井上成美だ。

米内も、山本も、井上も、米英と日本の国力差を認識しており、

「米英との戦争には勝算なし」

との認識で一致していたのだ。

海軍行政のトップ三人が同盟締結に反対する以上、海軍全体の立場も同じであり、海軍そのものが独伊との同盟を阻む強固な壁となった感があつた。

だが、平沼内閣の組閣時に、海軍大臣が米内から永野修身大将に交替したことで、海軍の姿勢が大きく揺らいだ。

永野は米内の一期先輩であり、海軍の中でも長老格と考えられている。

近衛内閣の二代前、廣田弘毅内閣で海軍大臣を務めた経験もある。

経歴に不足はなかったが、問題は視野が狭く、世界情勢を見据えた戦略眼を持たないことだ。情に流され易く、声の大きい方に付く傾向がある。

今の情勢下では、海軍大臣に適任とは言い難い。果たして平沼内閣の成立後、親独派の動きが活発化し始めた。

山本、井上の二人は、独伊との同盟締結に反対し続けており、「米英との協調を」と訴え続けたが、親独派は海軍内部にも少なくない。

海相がどっち付かずの態度を取る中、次官と軍務局長の二人が、内外からの圧力に抗し続けているというのが、現在の状況だった。

「危ないことに首を突っ込んでるわけじゃないだろうな？」

日高はさりげなく周囲を見回し、海軍関係者がいないことを確認してから、小声で聞いた。

浜は副官として、井上軍務局長の下で働いている。その立場上、井上の指示を受け、同盟締結阻止のた

めに動いているのではないかと考えたのだ。

「貴様は恩賜の短剣組だが、同期の中じゃ一番気が優しい男だった。教官の中にも『あいつは軍人に向いてないんじゃないか』と言っていた人がいたほどだ。政治に関わるなんて不似合いだと思うぞ」

浜は苦笑しながら、右手を左右に振った。

「俺は、何も関わっていない。軍務局長の下で働いてはいるが、仕事の内容は会議の議事録作成や書類の整理が主だ。俺が心配しているのは、貴様の方だよ。今後の情勢次第じゃ、最前線に出ることだってあるんだからな」

「火を噴く可能性があるのか？」

「独伊と組んだら、米英は間違ひなく敵に回る。できることなら、米英とはやりたくない」

「そいつは、俺も同感だ。俺は空が飛びたくて飛行機乗りになっただけで、本物の空中戦をやりたくないなんて思ったことはない。ただ……そのときが来たら、全力で戦うだけだ」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。